

しろ の たに  
城ノ谷遺跡発掘調査報告

2004(平成16)年2月

三重県埋蔵文化財センター

# 序

伊勢平野の北部のいわゆる北勢地域は、都と東国を結ぶ東海道が通り、古来東西交通の中継地として重要な役割を果たしてきた地域です。今回ここにご報告いたします城ノ谷遺跡も、その一端を担う重要な遺跡です。

今回は弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴住居をはじめとして掘立柱建物、溝等多数の遺構が検出されました。

しかし、このような当時の様相を映し出す鏡のような遺跡も私たちの生活が便利になっていく過程で、永遠に失われることになります。私たちはこの鏡が映し出す当時の様相ができる限り、正確にまた、真摯に受け止め、記録保存という形をとって、後世に伝える語り部の役割を果たさなければなりません。

発掘調査で明らかになった事実は、私たちを過去の世界に誘います。そうすると、過去の人々の生活が私たちのそれと変わらず、脈々と営まれていたことがわかります。しかし、それは少しの部分が解明されたに過ぎません。私たちは、今までの調査の成果を繋ぎ合わせて少しでも、過去を映し出す鏡の復元に努めなければならないでしょう。

今回の調査にあたりましては、日本道路公团中部支社、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道路推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会、関係機関および地元自治体をはじめとする、多くの方々の温かいご理解とご協力を頂きました。末筆になりましたが深く御礼申し上げます。

平成16年 2月

三重県埋蔵文化財センター  
所長 吉水康夫



## 例　　言

1. 本書は平成9年度より三重県が日本道路公団中部支社（平成13年2月、日本道公団名古屋建設局より改称）から委託を受けた、近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査のうち、三重県四日市市広永町字向山・三重都朝日町大字埋罈字刃ヶ谷に所在する、城ノ谷（しろのたに）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書が扱う調査成果は『近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ～Ⅲ』としてその概要を公表しているが、本書をもって正報告とする。
3. 調査は次の体制で行った。

　　調査主体　三重県教育委員会

　　調査担当　三重県埋蔵文化財センター　現場調査　調査第二課　田中久生

　　調査作業受託者　リックス株式会社

4. 本書の執筆、編集は金子智子が行った。
5. 本書が対象とした現場調査面積は、平成10年度本調査1,939m<sup>2</sup>、平成11年度175m<sup>2</sup>である。
6. 本書で示す方位は、国土座標第VI系を基準とする座標北を用いた。なお、磁北は約6度30分西偏している。（平成9年　国土地理院）
7. 本書では、下記の遺構表示記号を用いた。  
　　S H：竪穴住居　S B：掘立柱建物　S K：土坑　S D：溝　P i t：小穴
8. 本書で表記する色調は、農林水産省水産技術会議事務局および財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠した。
9. 発掘調査及び本書の作成に際して、下記の方々にご指導・ご協力を頂いた。（敬称略）  
　　日本道路公団中部支社、同四日市工事事務所、三重県県土整備部高速道路推進室、同四日市駐在、三重県企業庁、関係市町村教育委員会
10. 発掘調査の経費は、日本道路公団中部支社が負担した。
11. 本書が扱う発掘調査の資料や出土遺物は、当埋蔵文化財センターが保管している。

## 本文目次

I	前言	1
II	位置と環境	6
III	層位と遺構	7
IV	遺物	16
V	結語	21

## 挿図目次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	遺跡地形図	5
第3図	調査区位置図	5
第4図	遺構平面図	7
第5図	S H 3 平面・断面実測図	8
第6図	S H 2 平面・断面実測図	9
第7図	S H 4 平面・断面実測図	9
第8図	S H 5・20 平面・断面実測図	10
第9図	S H 21 平面・断面実測図	11
第10図	S H 20 遺物出土状況平面・断面図	11
第11図	S H 4 遺物出土状況平面・断面図	11
第12図	S B 22 平面・断面実測図	12
第13図	S B 28 平面・断面実測図	13
第14図	S B 30 平面・断面実測図	14
第15図	S B 34 平面・断面実測図	15
第16図	S B 33 平面・断面実測図	16
第17図	S H 2・3・4 出土遺物実測図	17
第18図	S H 4・5 出土遺物実測図	18
第19図	S H 5・20・21 出土遺物実測図	19
第20図	S B 22, S K 18・19・包含層出土遺物実測図	20

## 表目次

第1表	出土遺物觀察表(1)	22
第2表	出土遺物觀察表(2)	23

## 図版目次

図版 1	調査区全景	24
	調査区全景	24
図版 2	S H 2 炉跡出土状況	25
	S H 2 壁柱穴出土状況	25
図版 3	S H 2・3・4 完掘状況	26
	S H 3 遺物出土状況	26
図版 4	S H 4 完掘状況	27
	S H 5 完掘状況	27
図版 5	S H 5 遺物出土状況	28
	S H 20 完掘状況	28
図版 6	S H 21 完掘状況	29
	S B 22 完掘状況	29
図版 7	出土遺物写真(1)	30
図版 8	出土遺物写真(2)	31

# I 前 言

## 1 近畿自動車道名古屋神戸線の概要

東名・名神高速道路は我が国の基幹交通を担う大動脈として産業・文化・経済活動に大きな貢献を果たしてきた。しかし、共用開始後、20年余を経過した現在、ほぼ全線にわたって混雑が著しく、本来の高速性、定時性の低下性が低下しつつある。このままでは、量的増大に加え、多様化する将来の交通需要に対応することが困難であると予定されている。

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神高速道路）は第二東名高速道路とともにこれらとの問題に対応し、先発路線である東名・名神高速道路と一体になって、四全総で提唱されている交流ネットワーク構想を推進するための高規格道路網の根幹となるものである。

三重県内では、愛知県境から四日市市伊坂町の近畿自動車道名古屋関線（東名阪自動車道）との交差ヶ所である四日市JCTまでの約14kmについて、平成14年度を目途の整備が行われた。その経路は、愛知県境から長島町・桑名市と伊勢湾岸を南下して川越町で方向を大きく西に転じ、朝明川北岸の沖積低地から朝日町南縁の朝日町・四日市市を通るものである。なお、この経路は第二東名高速道路の一部を含めて伊勢湾岸道路とも呼称される。

## 2 調査に至る経緯

第二名神高速道路については、昭和62年6月に四全総高規格幹線道路として位置付けられ、9月には名古屋市～神戸市170kmが予定路線に編入された。

これを受け、昭和63年1月に建設省から三重県教育委員会に埋蔵文化財についての照会があり、その取り扱いに関する協議が開始された。県教育委員会では関係市町村教育委員会と協議を行うと共に、伊勢湾岸道路（第二名神・東名の一部分）路線内の埋蔵文化財の有無・現況を同年3月『伊勢湾岸道路・北勢バイパス建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅰ』で報告した。

平成元年2月、愛知県海部郡飛島村～神戸市165kmについて基本計画が決定され、平成2年12月には

長島IC～四日市JCTが都市計画決定された。

この間、平成元年4月に県教育委員会に三重県埋蔵文化財センターが設置され、埋蔵文化財保護行政を主体的に担当することとなる。同年10月には「東海環状自動車道・伊勢湾岸道路・北勢バイパスに係る埋蔵文化財保護連絡会議」を開催し、関係市町村と事業計画の概要・埋蔵文化財の所在状況と確認、その保護取り扱いについて協議した。平成2年には伊勢湾岸道路と接続する東海環状自動車道の分布調査を行い、5月に『東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告』で建設省に報告した。一方、伊勢湾岸道路に該当する四日市JCT～四日市北JCTでは7遺跡が報告されている。伊勢湾岸道路については、平成元年・2年度に路線内の分布調査を実施し、平成3年3月に『伊勢湾岸道路・北勢バイパス建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅱ』として集成した。6月には愛知県境～四日市JCTの分布調査結果として路線内10遺跡111,000m<sup>2</sup>の所在を通知した。

平成3年12月第二名神高速道路の飛島村～四日市19km、亀山市～城陽市68kmについて整備計画が決定され、同月に日本道路公団に調査指示が出され、その後平成5年11月には、上記区間に近畿自動車道飛島神戸線（第二名神）として建設大臣から道路公団に施工命令が出された。なお、平成4年1月には四日市JCT～四日市北JCTが都市計画決定されている。

この間、分布調査結果をもとに路線内の遺跡の取り扱いについて、道路公団・県土木高速道推進室・県教育委員会・県埋蔵文化財センターで協議を実施し、県教育委員会側から四日市JCT予定地に所在する伊坂城跡について、路線変更による現状保存を要望した。協議を重ねたが、路線は都市計画決定のために変更困難との結論に達し、伊坂城跡は記録保存の取り扱いに決した。ただし、今後は都市計画決定前に協議をするよう申し入れた。なお、四日市北JCT～亀山JCTの分布調査依頼を受け、平成5年12月に『第二名神自動車道埋蔵文化財分布調査結果報告（四日市JCT～亀山JCT）』で報告した。

平成6年度末には、道路公団から飛島村～四日市市について平成14年度共用の工事計画が提示され、この区間についての埋蔵文化財調査に関する協議が上記四者間で開始された。平成8年度には、平成9年度からの調査着手に向けた。その結果、調査体制・年次計画など具体的な調整・協議を重ね、平成9年度の調査は4遺跡154,000m<sup>2</sup>（範囲確認調査2,700m<sup>2</sup>含む）について実施することとなった。また、路線内の遺跡範囲の確定については、同年度冬季に現地の幅杭打設定後に1/1,000平面図をもとにを行うこととなった。

調査体制については、県埋蔵文化財センターの調査体制に組み込む形で、民間調査機関の活用をはかることとなった。

なお、路線名は平成8年8月に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）と改称され、調査対象となる愛知県境～四日市JCTの1/1,000平面図による再分布調査の結果を平成9年4月に『近畿自動車道名古屋神戸線（愛知県境～四日市JCT建設予定地内埋蔵文化財一覧Ⅱ）』として12遺跡を報告した。

該当遺跡については、その後、工事用道路建設に伴い1遺跡（山村遺跡）を追加したほか、遺跡名称の見直しを行った結果、平成14年度では13箇所16遺跡となっている。

以上のような経過を経て、平成9年度には当埋蔵文化財センター調査第二課に近畿自動車道名古屋神戸線（第二名神）愛知県境～四日市JCT担当職員を配置し、事業地内の発掘調査を開始するに至った。

### 3 発掘調査業務の概要

調査開始あたり、日本道路公団名古屋建設局（現中部支社）と三重県との間で、平成9年4月1日付けで「近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査委託に関する協定書」を締結した。

その内容は昭和42年9月30日付けで日本道路公団と文化庁との間で交わされた「日本道路公団の建設事業工事施工に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」を基本とする。現地調査期間については、平成11年度末までを目途とし、整理報告作業は発掘調査完了後3年以内までを目途とするものとした。

た。また、同時に平成9年度委託契約も締結した。

なお、年度毎に締結する委託契約については、平成10年度は、当該事業に加え、日本道路公団事業として新たに第二名神亀山東JCT～滋賀県境、および近畿自動車道名古屋線亀山～亀山、同自動車道尾鷲勢和紀勢～勢和に係る埋蔵文化財の発掘調査も実施することとなったため、これら3路線4区間にについて括して締結した。

さて、調査は現地調査（一次整理を含む）を優先としたが、用地状況の理由から平成9年度が範囲確認調査のみに留まることなどもあり、当初予定からはやや遅れ気味となった。しかし、平成12年度には現地調査をほぼ終了し、平成13年度からは二次整理及び報告書作成に着手することとなった。

この間、本書で報告する城ノ谷遺跡は、平成9年度に範囲確認調査を行い、翌平成10年度には本調査を実施し、翌11年度には未試掘部分の範囲確認調査を実施した。

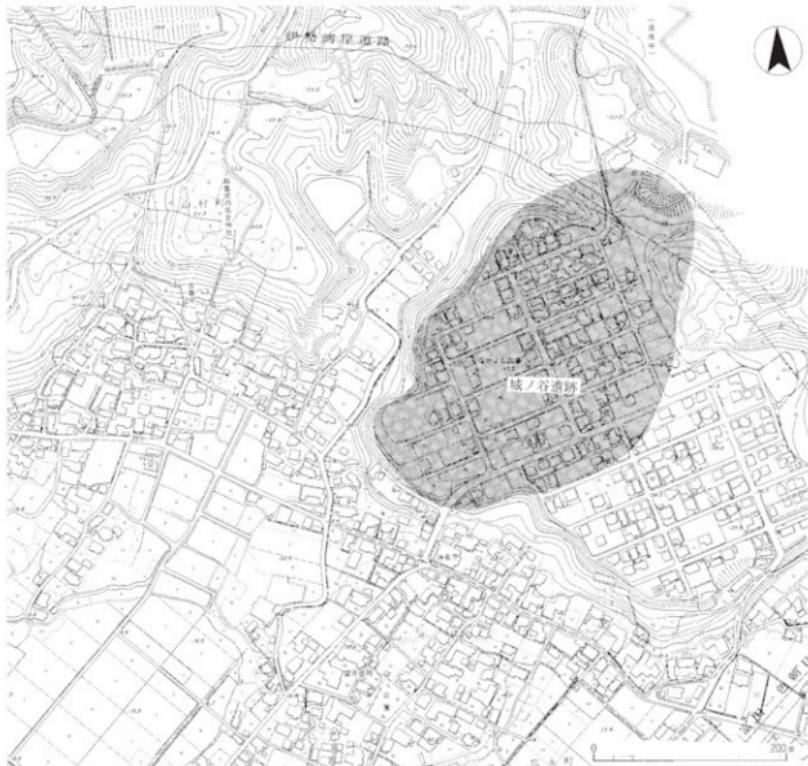
### 調査日誌（抄）

- 11月25日 表土除去開始。  
11月26日 表土除去継続。遺構検出開始。  
11月27日 堪穴住居跡検出。  
11月30日 検出作業継続。  
12月1日 検出作業継続。遺構掘削SD 1。  
12月2日 検出作業継続。遺構掘削SH 2。  
12月3日 検出作業継続。  
12月4日 遺構検出、SH 4・5、SK 5、SD 6～8、SK 9・10。  
遺構掘削SH 2・3。  
12月7日 雨天のため作業中止。  
12月8日 遺構検出継続。  
遺構掘削SK 9・10、SH 2・3。  
12月9日 遺構検出継続。  
遺構掘削。  
12月10日 遺構検出継続。  
遺構掘削SH 2～5。  
12月11日 遺構検出継続、遺構掘削、SH 2～4。  
12月14日 遺構検出継続。  
遺構掘削SH 4。弥生の高杯脚部出土。  
12月15日 遺構検出継続。SK 12、SD 13検出。

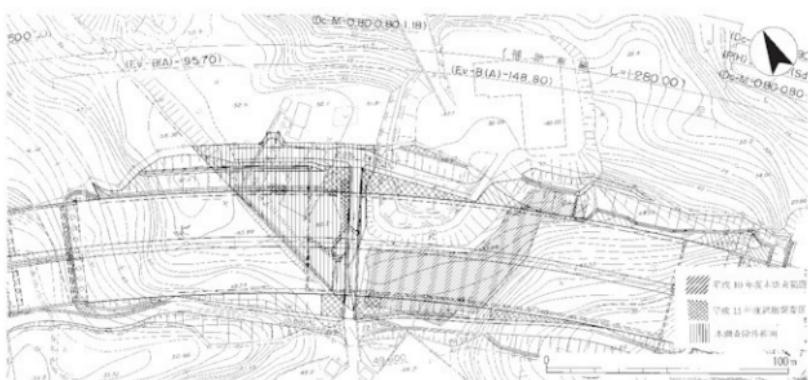
- 造構掘削 I 22付近のピット。
- 12月16日 造構検出継続。SD 13に平行する溝検出。造構掘削、SH 2~4。I 22付近のピット
- 12月17日 造構検出継続。  
造構掘削 SH 2~4、SH 2でベッド状造構確認。SH 3主柱穴検出、SD 15。
- 12月18日 造構検出継続。  
土層写真撮影、SH 2~4。
- 12月21日 造構検出継続。  
造構掘削、SH 2・4、SD 12・16
- 12月22日 造構検出継続。  
造構掘削、SK 12・SX 17。
- 12月24日 造構検出継続。  
造構掘削 SH 2~4。
- 12月25日 造構検出本日は中止。  
造構掘削、SH 2、SH 4遺物取り上げ。
- 1月 6日 造構検出継続。  
造構掘削 SH 4 炉跡検出。
- 1月 7日 造構検出継続。  
造構掘削 SH 2~4。
- 1月 8日 造構検出継続。  
造構掘削 SX 18・19、SH 4。
- 1月 9日 雨のため現場作業中止。
- 1月11日 造構検出継続。  
造構掘削、SH 2周溝全周することを確認。SH 5、SX 18。
- 1月12日 雨のため午前で作業終了。
- 1月13日 造構掘削、SH 5、SX 8
- 1月14日 造構掘削、SH 2、主柱穴検出、SH 5、  
焼失住居の可能性。SX 18・19は土坑扱いとする。
- 1月18日 造構掘削、SH 2・4・20、SB 22。
- 1月19日 雨のため現場作業中止。
- 1月20日 造構掘削、SH 5 焼失住居の可能性。  
SH 20、SB 22。  
SH 2~4 全景写真撮影。
- 1月21日 造構掘削、SH 4 貯蔵穴遺物取り上げ、  
SH 5 遺物取り上げ主柱穴検出、SH  
20、SB 22柱痕検出。
- 1月22日 SH 5 遺物取り上げ。SH 20、SB 22。
- 1月25日 造構掘削、SH 5・20・23、SB 22。
- 1月26日 造構掘削、SH 5・20・21、SB 28、  
J11のピットから弥生の器台出土。
- 1月27日 造構掘削、SH 5 遺物取り上げ後、完掘。  
SH 20、SB 28に切られる。SH 21周溝がほぼ全周することを確認。  
ヘリコプターによる空撮。
- 1月28日 造構掘削、SH 20・21。  
スカイマスターによる全景写真撮影。
- 1月29日 造構掘削、SH 4・20・21、SB 28。
- 1月30日 造構掘削、SH 5・20 土器取り上げ。  
SH 21全景写真撮影。
- 2月 1日 SH 5 焼土レベリング、ベルトはずし。  
SH 20集石出土状況実測。
- 2月 2日 雨のため現地調査中止。
- 2月 3日 雪のため午前で現地調査中止。
- 2月 4日 造構検出、SB。
- 2月 5日 造構検出。現地説明会の準備。
- 2月 8日 SH 5 炭化材出し。
- 2月 9日 SH 5 炭化材出し。
- 2月10日 SH 5 炭化材出土状況写真撮影。
- 2月12日 SH 5 炭化材取り上げ終了。
- 2月15日 SH 5 北壁沿いに周溝検出。  
SB 33検出。
- 2月16日 SB 33・34完掘写真撮影。  
SH 5 北辺、東辺周溝確認。



第1図 遺跡位置図（1:50,000）『この地図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図（桑名・蘿野・四日市東部・四日市西部）を掲載したものである。』



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

## II 位置と環境

城ノ谷遺跡（1）は、三重県四日市市広永町字向山・三重郡朝日町大字埋籠字刃ヶ谷に所在する。遺跡は広永団地の造成などでこれまでのさまざまな改変によって、そのほとんどが消滅しているが、かつては、団地のある丘陵全体に広がっていたものと考えられている。

地形的には朝明川下流北岸、朝日丘陵南縁にある。今回の調査地は北東隅にある。調査区内の標高は52~47mで、緩やかに南西方向に下る斜面である。東方の水田との比高は、約30~40mで、東側から小さな谷が入る。

以下に、こうした立地を踏まえながら城ノ谷遺跡の所在する地域の歴史的な変遷について見ていくたい。

まず、縄文時代には大安町照光寺遺跡や北勢町覚正塙内遺跡、川向遺跡、蘿野町河西野遺跡などがある。河西野からは、十数点の草創期の矢柄研磨器が出土している。

続いて弥生時代になると、前期では、遠賀川系土器が出土して環濠が確認された四日市市永井遺跡（2）や大谷遺跡（3）がある。中期になると菟上遺跡（4）や山村遺跡（5）久留倍遺跡（6）などがある。菟上遺跡では竪穴式住居が80棟以上、棟持柱式掘立柱建物などが、山村遺跡では19基の方形周溝墓が確認されている。後期になると、丘陵上の遺跡が更に増え、西ヶ庄遺跡（7）や山奥遺跡（8）などが知られている。西ヶ庄遺跡では29棟の竪穴住居が、山奥遺跡からは100棟を超える竪穴住居が確認されている。朝明川北岸には金塚遺跡（9）や当遺跡、また前述の久留倍遺跡などが集落の最盛期を迎える。

また、朝明川流域では重地山の伊坂遺跡（10）から出土した扁平錐式袈裟桜文銅鐸が特筆される。

古墳時代になると、前期では数少ないが、海蔵川下流域に突出する低丘陵端に築造された、志氏神社古墳（11）がある。中期になると古墳群（12）がある。これは方墳を主体としたものである。後期になると、朝明川の谷底平野をのぞむ丘陵・台地縁辺

部中心に、数基から十数基で成る小規模な古墳群が出現していく。八幡古墳（13）は複室形態の構造の横穴式石室として知られる。朝明川北岸の城ノ谷遺跡（14）でも前方後円墳が新たに発見されたが、これは削平されていた。朝明川南岸の死人谷横穴墓（15）からは金銅製環頭太刀柄頭が出土している。朝明川北岸では広永横穴墓群（16）や菟上遺跡の横穴墓1基など、横穴墓の分布確認されている。

古代になると、律令制のもとで北勢地域北部には員弁・桑名・朝明・三重郡の四郡が置かれ、朝明川流域のほぼ全域は、朝明郡に属していた。

西ノ広遺跡では、奈良時代の掘立柱建物が多数検出され、大型建物の計画的配置や面面観の出土などから、朝明郡衙などの可能性が指摘されている。菟上遺跡では、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物が多数確認されている。

北勢地域の白鳳寺院は一郡に一寺置かれており、朝明郡では朝日丘陵東端には繩生庵寺（17）がある。この塔心礎舎利孔からは、唐三彩の椀を蓋とする舍利容器の外容器が出土している。

中世になると、朝明郡内には伊勢神宮の御厨や御薦が多く見られる。しかし、朝明川流域での調査例は少なく、その様相は明らかでない。辻子遺跡（18）は、平安時代から鎌倉時代の集落遺跡で、条里の方向に一致した建物や溝が検出されている。

中世後期になると、中世城館が数多く存在するようになる。代表的なものに、保々西城跡・市場城跡や菟生城跡（19）・伊坂城跡（20）・広永城跡などがある。

### （主な参考文献）

- ・小玉道明ほか1970『西ヶ庄遺跡』『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財報告』三重県教育委員会
- ・小玉道明ほか1973『四日市の後期古墳』四日市市教育委員会
- ・鈴木敏雄1938『三重県三重郡八郷村考古誌』
- ・八賀晋ほか1993『四日市市史第3巻資料編考古Ⅱ』四日市市
- ・腹部貞蔵ほか1988『四日市市史第2巻資料編考古Ⅰ』四日市市
- ・早川裕吉1988『繩生庵寺跡発掘調査報告』朝日町教育委員会
- ・弥永貞三1979『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版

### III 層位と遺構

#### 1 層位

検出面までの深さはほとんどなく、腐食土の下に褐色粘質土が薄く堆積しており、その面を検出面とした。

#### 2 遺構

##### (1) 弥生時代後期

###### 竪穴住居

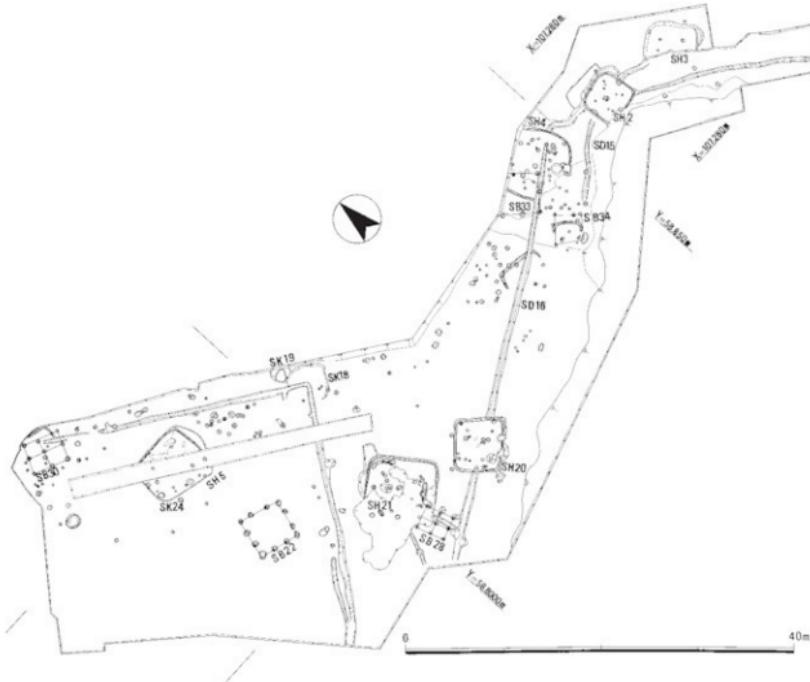
SH2 調査区の東部で検出した。東西4.35m、南北4.15mの隅丸方形住居である。北3分の1は深さ0.4mとよく残るが、他は、深さ5cmとかなり削平

されていた。主柱穴は4個とも径15cm、深さ50cmほどである。

北壁面では壁柱穴を5個検出した。壁面に径幅5cm、深さ30~40cmの孔を50cmほどの間隔で穿ち、その底は周溝を数cmほど掘り込んでいる。細い柱を据えていたものと考えられる。

炉は、住居内中央やや北寄りにある。0.5m×0.4mとやや南北に長い隅丸方形で、中央やや南寄りに、長さ30cm弱の炉石の北側は、擂鉢状に掘り窪められ、被然による赤変硬化が見られた。

周溝を4辺に巡らすが、南辺の大部分は流出している。南辺中央に小規模な貯蔵穴をもつ。



第4図 遺構平面図 (1:500)

**S H 3** 調査区東端部で検出した。南北6.5m×東西3.6mだが、西側の辺は攪乱により削平されている。主柱穴と思われるビットを検出した。床面は壁溝の検出を行ったところ硬化面の存在を確認した。

**S H 4** 調査区東半部中央で検出した。西側は調査区外に延びる。南北7.4mの大型住居である。北東部では深さ0.5cmだが、南西部では削平されている部分もある。

主柱穴は4ヶ所確認できた。径25~35cm、深さ30cmほどである。

炉は中央やや西寄りにある。床面を直径40cm程度、ほぼ円形に掘り下げたもので、被熱による赤変硬化がみられた。周溝を4辺に巡らすが、南西は流失により消滅している。南西中央に貯蔵穴をもつ。

**S H 5** 調査区の西部で検出した。今回の調査区で検出した竪穴住居の内で、このS H 5のみが火災に遭い焼失した住居である。東西6.5m×南北6mである。住居の北部約3分の1から焼けて炭化した材や、それらを覆うように堆積した焼土が検出された。焼土は住居の縁から40~50cm程度のところまでを帯状に覆っていた。厚いところで10cmほどである。検出した材は全て芯まで炭化していた。炭化材の多く

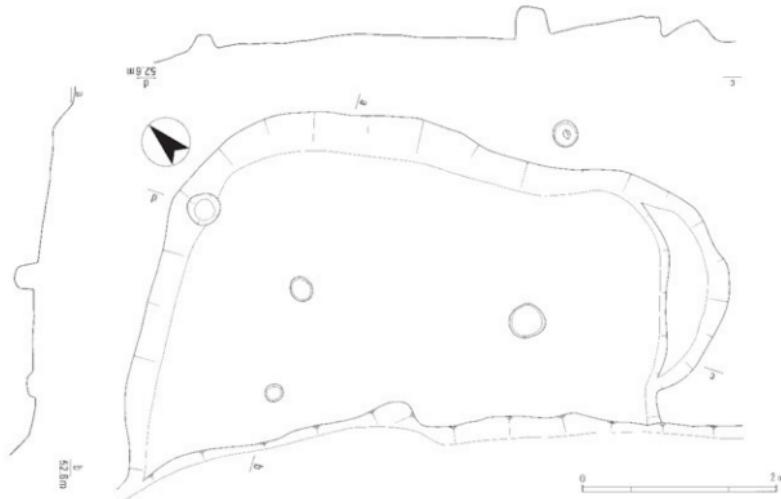
は垂木材と思われるが、何か、直径10数cm程度となるような材があり、桁、梁等の構造材かもしれない。垂木と直交する細い材も確認された。横木であろう。

また、住居の北東部から黄白色の粘土塊が検出された。粘土塊の下面は被熱により赤変している。炭化材を覆う焼土とは明らかに質の異なる粘土である。

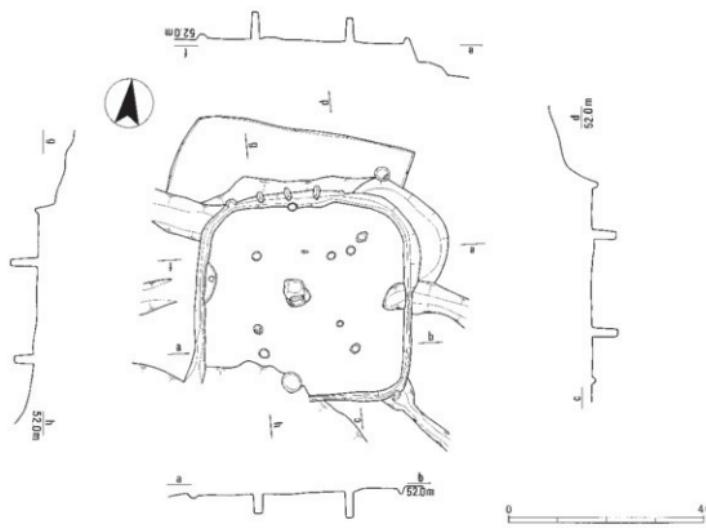
**S H 20** 調査区中央部やや西寄りで検出した。南北7.2m×東西6.5mである。検出面からの深さは最深部で0.6mである。東西は攪乱により削平されている。南壁付近のビットからは遺物が集中して出土した。北辺全体及び、東西辺の7割くらい周溝を確認した。南辺は削平されていたため、検出できなかった。炭化材を含む土が柱痕跡として検出された。腐食どめのために焼いたものの痕跡かと思われる。

**S H 21** S H 20の東で検出した。南北6.3m×東西5.8mで、最深部は0.47mである。周溝がほぼ全周することが確認できた。南壁の周溝上に帯状に広がる焼土ブロック、炭化材を含む層が確認された。

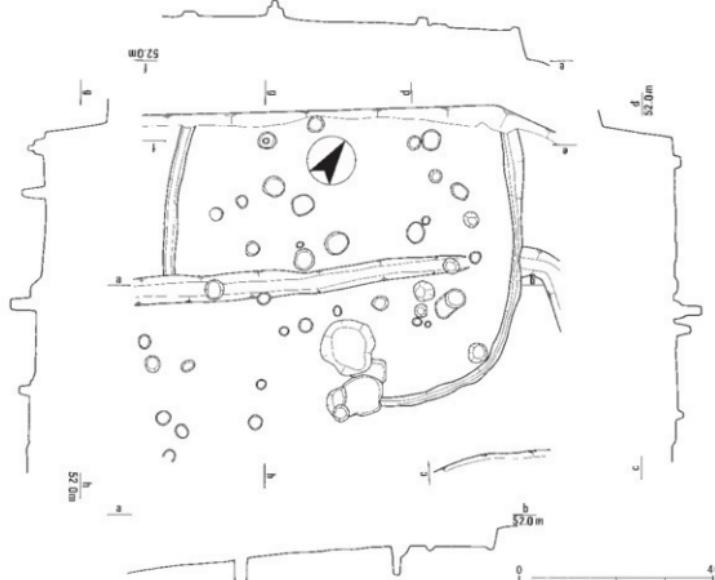
主柱穴とみてよいビットも4ヶ所検出された。ほぼ床の中央部の端に焼土のあるビッチを検出した。床の赤変硬化の痕跡と思われる。



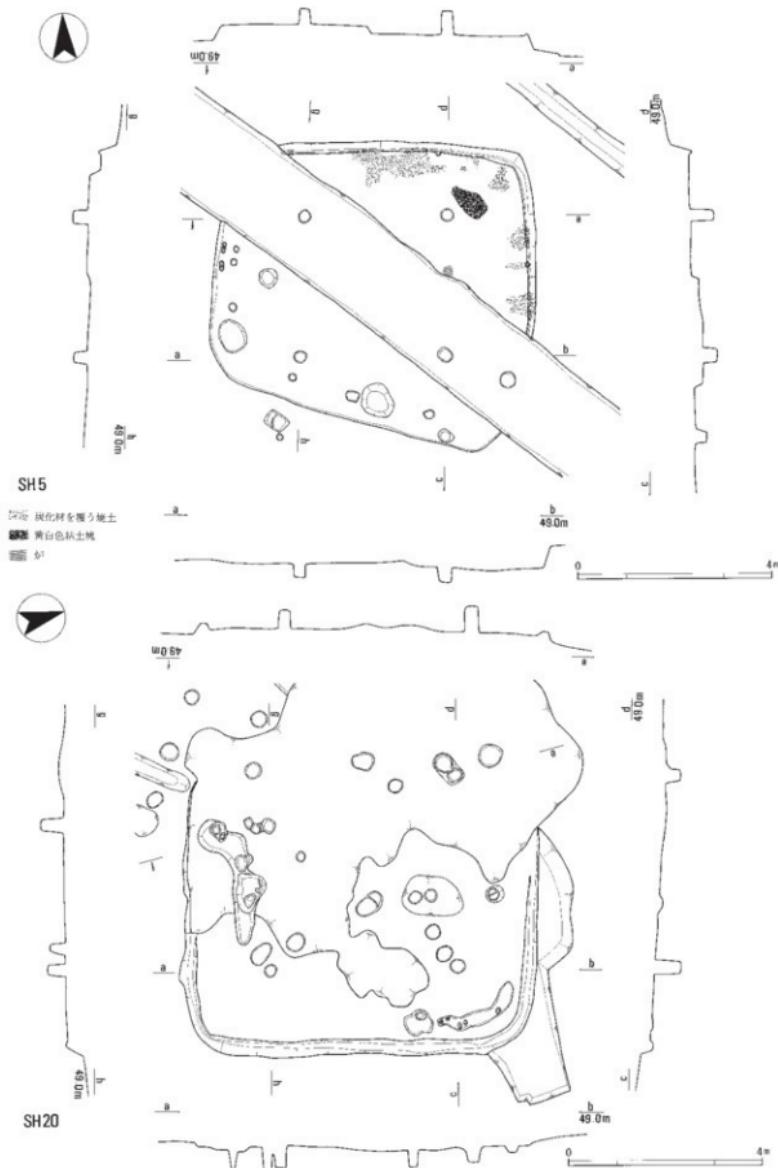
第5図 S H 3 平面・断面実測図 (1:50)



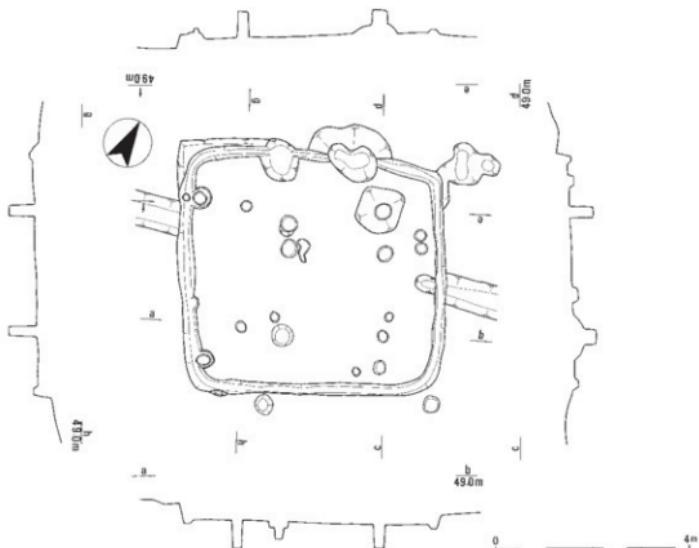
第6図 SH 2平面・断面実測図 (1:100)



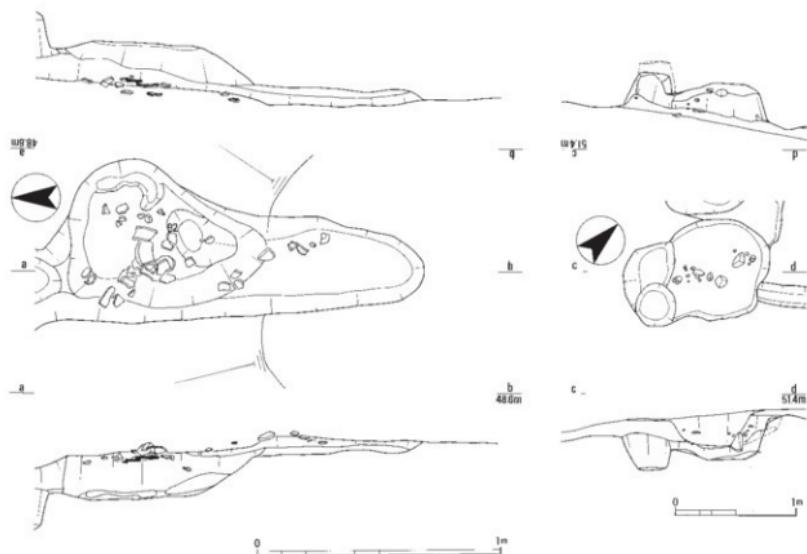
第7図 SH 4平面・断面実測図 (1:100)



第8図 S H 5・S H 20平面・断面実測図 (1:100)



第9図 SH21平面・断面実測図 (1:100)



第10図 SH20遺物出土状況平面・断面図 (1:20)

第11図 SH4 遺物出土状況平面・断面図 (1:40)

## (2) 古墳時代後期

### 掘立柱建物

S B 22 調査区西部で検出した。3間×3間の総柱建物で、平面形は北辺が長い台形である。柱間は1.2~1.65mと不等間で、4辺とも中央の柱間が1.4~1.65mと広い。柱穴からは、7世紀代の須恵器蓋片が出土した。

### 土坑

S K 18・19 調査区中央やや西寄りで検出した。

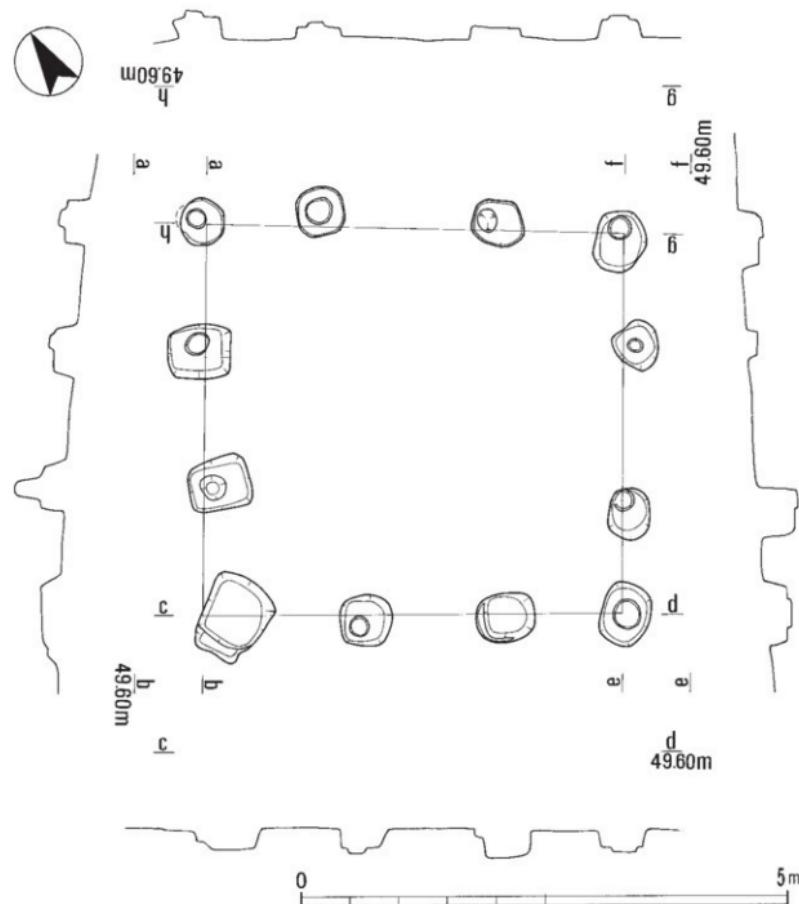
いずれからも炭化材が混入している。両者の埋土に違いは、みられなかった。

## (3) 時期不明の遺構

### 掘立柱建物

S B 28 調査区南端部で検出した。2間×2間の総柱建物である。柱間は1.2~1.5mと不等間で、平面形は崩れ、北辺中央の柱穴がやや北にである。

S B 30 調査区西端で検出した。2間×2間以



第12図 S B 22平面・断面実測図 (1:50)

上の総柱建物である。柱間は東西が1.8m、南北が1.6mである。

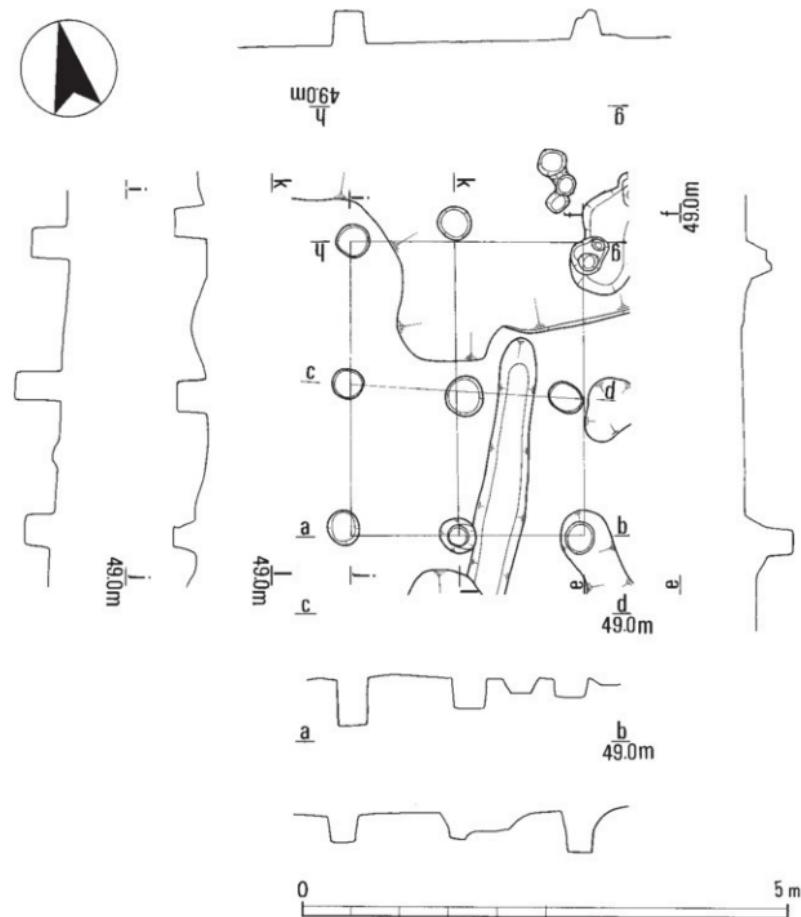
S B 33 調査区中央よりやや東側で検出した。北側が調査区外に延びるため、全容は明らかではないが、おそらく2間×2間の側柱建物であろう。東西方向の柱間は2.5mで、南北方向の柱間は2.2～2.5mである。

S B 34 調査区中央よりやや東寄りで検出した。

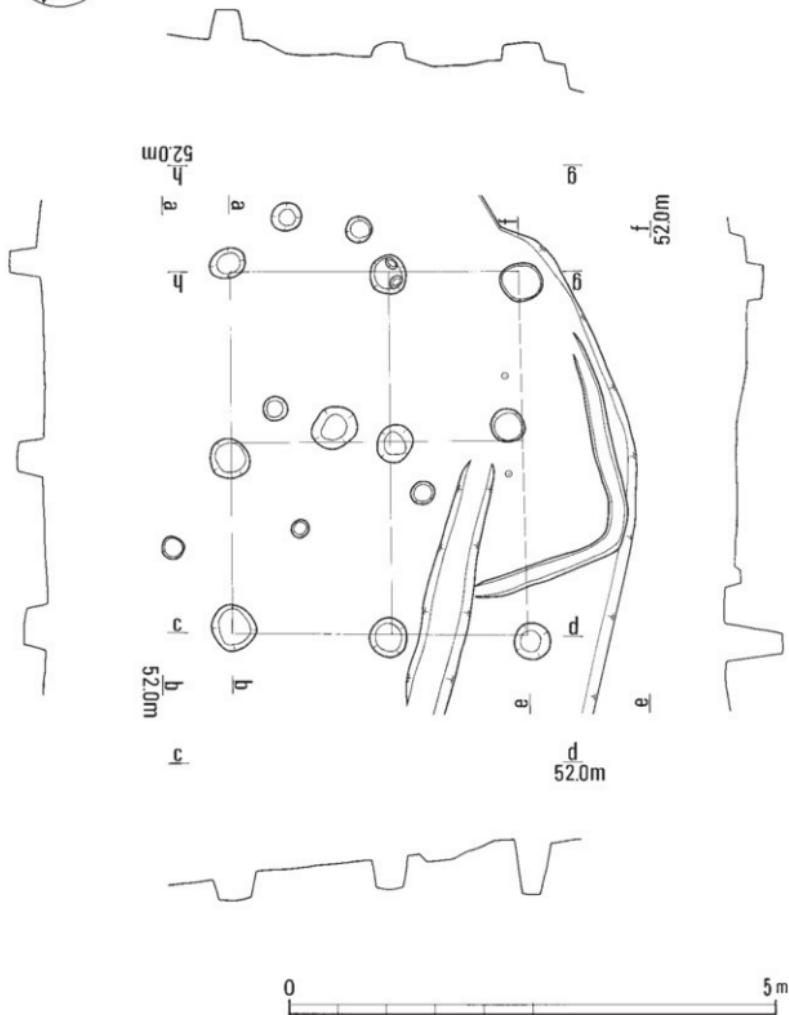
2間×2間の側柱建物で、東西方向の柱間は1.9mで、南北方向の柱間は2.2～2.5mである。

### 溝

S D 15・16 調査区中央やや東で検出した。平面コの字状の溝である。調査区内のなかでも傾斜の強い部分であることから、竪穴住居が流失して傾斜上方の周溝のみが残ったものではないかとも考えられるが、その性格は不明である。



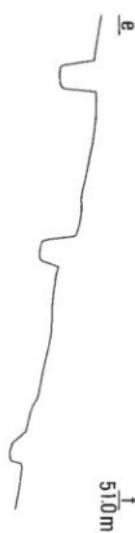
第13図 S B 28平面・断面実測図 (1:50)



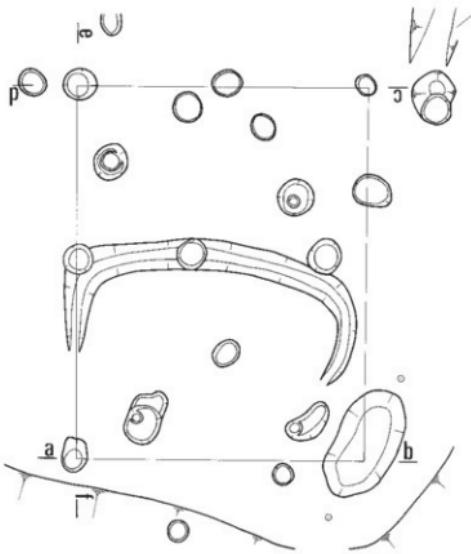
第14図 SB 30平面・断面実測図 (1:50)



52.0m



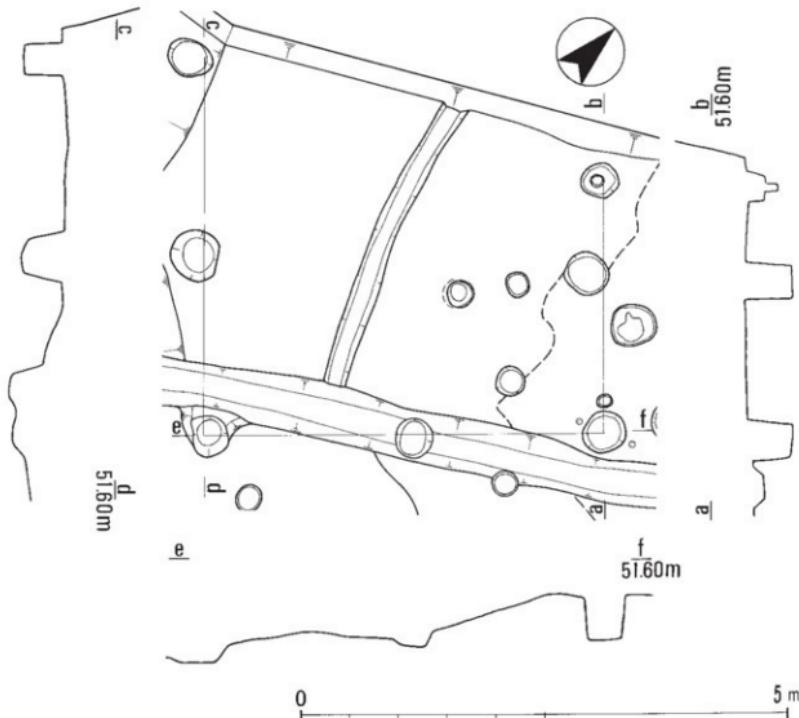
51.0m



51.0m



第15図 S B 34平面・断面実測図 (1:50)



第16図 SB 33平面・断面実測図 (1:50)

## IV 遺 物

遺物は、概ね弥生時代後期のものであるが、若干古墳時代以降のものを含む。以下、遺構ごとにその概略を述べる。個々の調整は、観察表を参照されたい。

### 1 遺構出土の遺物

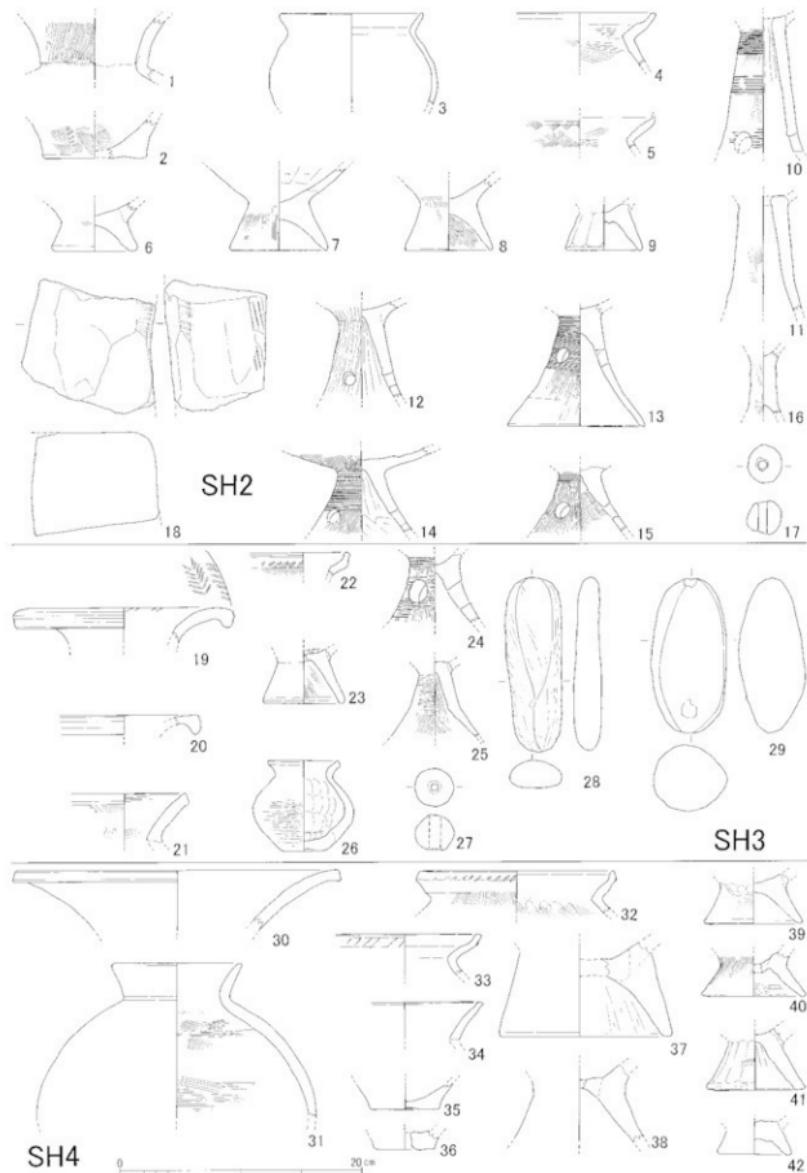
#### S H 2 出土遺物 (1~18)

土器はいずれも小片である。多くが弥生時代後期に属すると思われるが、13~15は古墳時代初頭の有稜高杯で、複数の時期の遺物が確認できる。弥生土器は1・2が壺、3~9が甕、10~12が高杯である。高杯は、穿孔が下方に位置し、脚裾が外反することから弥生時代後期のものであろう。これに対し、13~

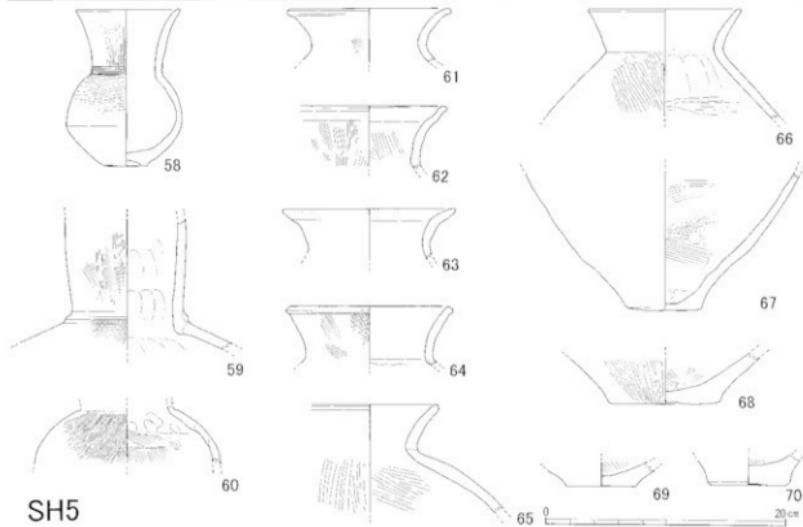
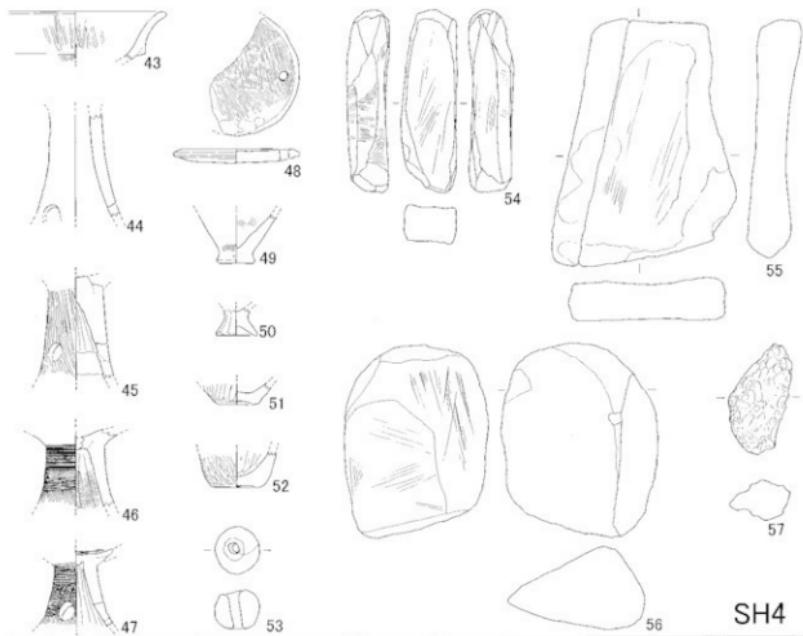
15の高杯は穿孔が上方に位置し、脚部の内彎傾向からも古墳時代初頭のものであろう。16はミニチュアの高杯脚部であるが、脚の外反傾向から古墳時代に属する可能性が高い。17は土玉、18は砾石である。

#### S H 3 出土遺物 (19~29)

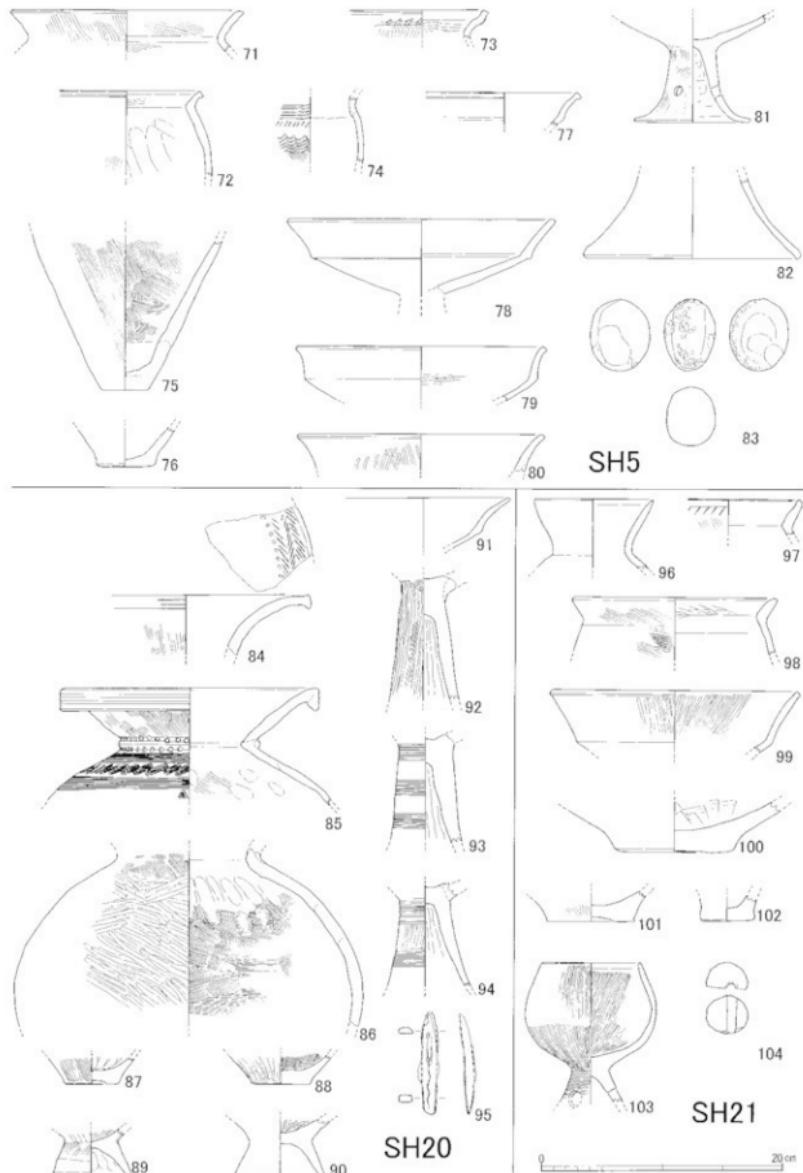
土器は弥生時代後期と古墳時代初頭に属すると思われる。19・20は壺、21・22・23は甕、24・25は高杯、26はミニチュアの甕である。24は穿孔が上方に位置すること、25は破片なので不確定だが、脚裾が内彎形状を探ると推定されることから、いずれも古墳時代初頭に属しよう。27は土玉、28・29は石製品である。28は用途不明であるが、29は磨石である。



第17図 SH2・3・4出土遺物実測図 (1:4)



第18図 SH 4・5出土遺物実測図 (1:4)



第19図 S H 5・20・21出土遺物実測図 (1:4)

#### S H 4 出土遺物 (30~57)

土器はいずれも弥生後期土器である。30~31は壺、32~42は甕、43~47は高杯、48は蓋、49~52はミニチュア土器である。甕は受口甕32~33とく字形甕34があり、受口甕のうち32は口縁端部が撥ね上げ口縁状に短く上方に突出するタイプである。甕の底部は台付のものが多く、特に37などはかなりの大形品の脚台であろう。高杯はいずれも脚柱部が長く円孔が低い位置にあるもので、いわゆる山中式に属するものであろう。ミニチュア土器は、49~50が甕形を呈するが、51~52は形状が不確定であるが体部外面をミガキ調整した精製の土器である。53は土玉、54~56は石製品で、54・55は砥石、56は磨石、57は軽石である。

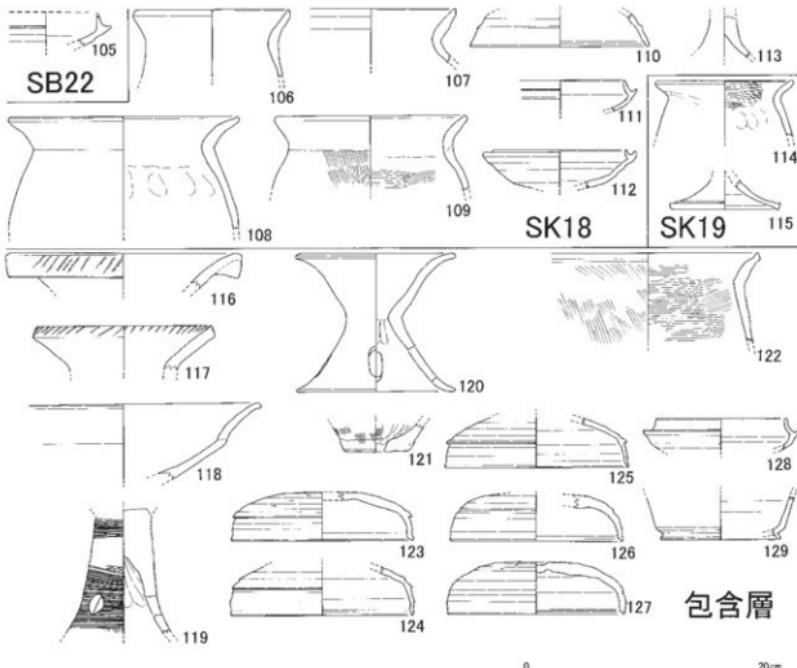
#### S H 5 出土遺物 (58~83)

土器はいずれも弥生後期土器と思われる。58~70

は壺である。このうち、58・59は当地域としては珍しい長頸壺である。61~66は広口壺ないしは短頸壺の類である。65は器形は甕にも類似するが、体部外面をミガキ調整しており、壺と推定した。71~76は甕である。く字形甕と受口甕がある。受口甕73は、口縁端部が外斜面を形成する。77~82は高杯で、いずれも山中型のものと思われる。83は石製品のタタキ石である。

#### S H 20 出土遺物 (84~95)

出土した土器はすべて弥生土器で、84~86は壺、87~90は甕、91~94は高杯である。このうち、85は頸部から直口気味に外方へ開く加飾の広口壺である。口縁部は擬凹線を施した垂下口縁で、頸部に竹管状刺突を上下に加えた突包を有し、体上部外面には直線文と波状文を加飾する。高杯はいずれも脚柱部が長く、弥生時代後期のものと思われる。95は鉄



第20図 SB22、SK18・19、包含層出土遺物実測図 (1:4)

製品でヤリガンナかと思われる。

#### S H21出土遺物（96～104）

土器はいずれも弥生後期土器である。96は小形の短頸壺で、口縁部がやや直線的に開く。97・98は甕で、97は受口甕である。99は有稜高杯、103は楕状高杯で、いずれも杯部にタテミガキを加えている。S H 5 や S H 20出土の高杯と比べると有稜高杯の杯上部がやや発達しており、弥生時代後期でも新しい時期の所産であろう。100～102は底部で、100が壺、101と102は甕であろう。104は土玉である。

#### S B 22出土遺物（105）

須恵器の杯身である。7世紀代のものであろう。

#### S K 18出土遺物（106～113）

106～109は土師器甕、110～112は須恵器である。110は杯蓋、111・112は杯身、113は高杯である。土師器甕はいずれも口縁端部外面にヨコナデによる面をもつ。須恵器杯身は、立ち上がりの長さに差異はあるが両方とも浅い器形であり、7世紀代のもの

であろう。

#### S K 19出土遺物（114・115）

114は土師器の甕、115は須恵器の高杯である。いずれも7世紀代の所産であろう。

## 2 包含層出土の遺物（116～129）

大きく弥生時代後期と古墳時代後期のものとに分かれる。116～121は弥生土器、122は土師器甕、123～129は須恵器である。

弥生土器は壺（116・117）・高杯（118・119）・器台（120）・甕底部（121）を図示した。121は底に穿孔を有する。器台120は脚部に楕円形の穿孔を有する。

土師器甕（122）は、口縁端部をヨコナデによって僅かに摘み上げ、外斜面をもつ。

須恵器は、6世紀代の杯蓋（123～127）・杯身（128）と、奈良時代の杯身（129）がある。

## V 結 語

今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居6棟と7世紀代の掘立柱建物1棟、時期不明の掘立柱建物4棟、7世紀代の土坑2基などを検出した。

今回の調査で検出した弥生時代後期の竪穴住居6棟のうちS H 2・5は、竪穴住居の上部構造を検討する上で良好な資料である。

焼失住居S H 5で検出した焼土は、住居縁から40～50cmの幅で帶状に残り、明らかに炭化材を覆っていた。このことから、焼土は、屋根に被せられていた土が火災によって赤変し、帶状に崩落して堆積したものと考えられる。竪穴住居の上部構造の復元は今後の課題であるが、焼土範囲が帶状に限定されることから、屋根の根部にのみ土を葺く形態であろうと考えられる。

S H 2 の北壁で検出した壁柱穴は、壁面にほぼ等間隔に並ぶものである。壁面に残る柱痕跡の径5cmの孔から数cm程度の材と推定されるが、垂木を何らかの方法で支えたものと考えられる。棟を高くでき、

住居内の容積を増す工法といえよう。遺存していたのは北壁のみである。少なくとも対面の南壁も壁柱穴が配置されていたと推測されるが、壁面の流失が残念である。

城ノ谷遺跡の北西300mには、谷をひとつ挟んで、弥生時代後期の高地性集落を確認した金塚遺跡がある。金塚遺跡の標高は70mほどであり、本遺跡より、20mほど高い位置にある。この2つの遺跡の関係はもとより、西方1.5kmにある西ヶ広遺跡を含め、朝日丘陵及び周辺の中位段丘面に分布する同時期の遺跡の分布をあわせて、今後の検討課題としたい。

### ■

(1) 宮本長二郎『日本原始古代の住居』1996 中央公論美術出版

(2) 大川 操氏のご教示による。

番号	登録番号	器種	計測値(cm)	調査の特徴		胎土	色調	寸法 現存	出土 位置
				内	外				
1	003-02	弥生土器	7.6	摩滅のため調査不明	(?)×(?)×6.5cm/1.0cm	やや暗～0.2cm秒	10YR7/4	7.5YR7/6	—
2	002-06	弥生土器	7.6	(?)×5.5cm/1.0cm	(?)×7.6cm/1.0cm	暗～0.1cm秒微	7.5YR7/6	7.5YR7/6	—
3	003-03	弥生土器	11.6	摩滅のため調査不明	(?)×(?)×6.5cm/1.0cm	やや暗～0.2cm秒	2.5YR4/1	10YR7/6	4.12
4	002-07	弥生土器	7.2	(?)×7.6cm/1.0cm	(?)×(?)×6.5cm/1.0cm	やや暗～0.5cm秒	10YR6/6	10YR6/6	—
5	003-01	弥生土器	(?)×5.5cm/1.0cm	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	やや暗～0.1cm秒	10YR6/3	10YR6/3	—
6	002-05	弥生土器	7.0	摩滅のため調査不明	一部 (?)× (?)	やや暗～0.3cm秒	7.5YR7/4	10YR6/4	—
7	002-03	弥生土器	8.0	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)	やや暗～0.7cm秒	2.5YR4/1	7.5YR6/6	—
8	002-02	弥生土器	7.2	(?)×5.5cm/1.0cm	一部 (?)× (?)	やや暗～0.3cm秒	2.5YR4/1	7.5YR6/6	—
9	002-04	弥生土器	6.2	(?)× (?)	(?)× (?)	(?)× (?)	暗～0.3cm秒微・ 1.5YR6/6	2.5YR6/6	—
10	002-01	弥生土器	高杯	摩滅のため調査不明	(?)× (?)× (?)	やや暗～0.2cm秒	2.5YR5/2	2.5YR5/1	—
11	001-01	弥生土器	高杯	摩滅のため調査不明	(?)× (?)× (?)	やや暗～1.2cm秒	10YR5/1	10YR5/4	—
12	001-02	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)	暗～0.3cm秒微	10YR7/4	10YR7/4	—
13	001-05	土器鉢	11.2	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	暗～0.4cm秒微・ 1.5YR6/6	10YR7/6	—
14	001-04	土器鉢	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	やや暗～0.2cm秒	5YR6/6	5YR6/6
15	001-03	土器鉢	高杯	(?)×5.5cm/1cm	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	10YR5/2	10YR5/3
16	001-06	土器鉢	(?)×7.6cm/1cm	(?)	(?)× (?)	(?)× (?)	(?)× (?)	10YR4/1	10YR4/1
17	003-04	土製品	玉玉	重24.9g	(?)	やや暗～0.1cm秒	10YR8/4	10YR8/4	—
18	003-05	石製品	砾石	重1490.00g	(?)	5YR7/1	5YR7/1	—	—
19	005-05	弥生土器	18.0	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	やや暗～0.3cm秒	10YR7/4	10YR7/4	2.12.503
20	005-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
21	005-04	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
22	005-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
23	005-07	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
24	005-06	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
25	005-08	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
26	005-09	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
27	005-01	土製品	玉玉	重24.8g	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)
28	006-01	石製品	泥垢不明	重202.09g	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)
29	006-02	石製品	砾石	重450.00g	(?)	(?)	(?)	(?)	(?)
30	012-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	1.12.504
31	008-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
32	013-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
33	013-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
34	007-06	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
35	007-04	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
36	014-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
37	007-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
38	007-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
39	011-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
40	011-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
41	014-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
42	007-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
43	013-03	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
44	008-01	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
45	011-01	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
46	011-02	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
47	014-04	弥生土器	高杯	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
48	011-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
49	014-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
50	011-05	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
51	011-06	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
52	011-04	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
53	013-04	土製品	玉玉	重41.0g	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
54	009-02	石製品	砾石	重327.40g	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
55	010-01	石製品	砾石	重1130.00g	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
56	009-01	石製品	砾石	重1680.00g	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
57	014-05	砾石	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
58	019-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
59	020-03	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
60	016-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
61	019-01	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
62	015-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
63	018-02	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—
64	015-04	弥生土器	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	(?)× (?)× (?)	—

第1表 出土遺物観察表(1)

番号	登録番号	器種	計測値(cm)	調査の特徴		出土位置		
				内	外			
65	018-01	弥生土器 壺		(付) 4	(付) 4	直 ~0.5cm 細 ~0.3cm	2,577/2 2,577/2 — S65	
66	020-01	弥生土器 壺	12.5	工具による付	刃方向の付4本/1cm	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	5787/6 5787/6 11/12 S65	
67	017-01	弥生土器 壺	6.0	32付+33付96本/1本	摩訶のため調整不明	やや粗 ~0.3cm 細 ~0.3cm	10787/6 10787/6 — S65	
						付付繩		
68	018-03	弥生土器 壺	9.0	(付) 4	(付) 4	直	7,578/4 7,578/4 — S65	
69	016-05	弥生土器 壺	5.7	ハサミ状に残る	摩訶のため調整不明	やや細 ~0.4cm 細 ~0.4cm	2,574/1 2,574/1 — S65	
70	016-07	弥生土器 壺	6.8	ハサミ状に残る	摩訶のため調整不明	~0.2cm 細 ~0.2cm	2,574/1 5786/6 — S65	
71	015-01	弥生土器 壺	18.4	32付+33付4本/1cm	摩訶のため調整不明	直 ~0.1cm 細微 ~0.1cm 細微	5786/6 5786/6 1/12 S65	
72	015-06	弥生土器 壺		32付+33付4本/1cm	摩訶のため調整不明	~0.5cm 細 ~0.5cm	10787/2 10787/2 — S65	
73	015-03	弥生土器 壺		ハサミ	摩訶のため調整不明	やや粗 ~0.3cm 細 ~0.3cm	5786/6 5786/6 — S65	
74	016-01	弥生土器 壺		摩訶のため調整不明	摩訶文5本/1.2cm	直 ~0.3cm 細多	10786/2 10786/2 — S65	
					工具による刺突・波状文			
75	017-02	弥生土器 壺	3.9	刃方向の付7本/1.0cm	刃方向の付7本/1.0cm・33付着付付	~0.5cm 細 付付繩	7,578/4 7,578/4 — S65	
76	016-06	弥生土器 壺	4.8	摩訶のため調整不明	直	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	2,576/3 10787/4 — S65	
77	015-02	弥生土器 長杯		32付	摩訶のため調整不明	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	2,578/2 10786/6 — S65	
78	020-04	弥生土器 高杯	21.8	摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.15cm 細 ~0.15cm	5786/6 5786/6 1/12 S65	
79	016-04	弥生土器 高杯	20.0	一部3付残る	摩訶のため調整不明	直 ~0.3cm 細多	7,578/2 7,578/2 1/12 S65	
					付付繩			
80	015-05	弥生土器 高杯	19.8	32付	32付+33付	直 ~0.3cm 細微 ~0.3cm 細微	5786/6 5786/6 1/12 S65	
81	020-02	弥生土器 高杯	9.8	工具による付	32付+33付3本/1.0cm・三方に孔	直 ~0.4cm 細 ~0.4cm	2,578/3 2,578/3 — S65	
82	015-08	弥生土器 高杯	18.0	摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.5cm 細多	5786/6 5786/6 — S65	
83	016-08	石製品 磨石		直	直	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	2,577/3 — S65	
84	022-05	弥生土器 壺		直直+4付	直による凹部・32付+1付後付	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	10786/2 10787/4 — S620	
85	021-01	弥生土器 壺	20.5	付付+2付残る	ハサミ付付後・直管斜突・摩訶文	やや粗 ~0.8cm 細 ~0.8cm	2,578/1 2,578/6 7/12 S620	
					10本/1.4cm・波状文9本/1.3cm	付付繩		
86	022-06	弥生土器 壺		工具による付+4付	直+4付残る	直 ~0.6cm 細微 ~0.6cm 細微	10786/4 10786/4 — S620	
					付付繩			
87	022-03	弥生土器 壺	4.0	2付+2工具による付	32付+33付+直	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	2,576/2 5787/6 — S620	
88	022-02	弥生土器 壺	4.4	付+1直/1cm	工具による付+2付・底部付+前あり	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	10781/1 10786/6 — S620	
89	021-05	弥生土器 行付	6.2	32付+2付+2付残る	直+2付+1工具+2付残る	直 ~0.3cm 細微 ~0.3cm 細微	10786/4 2,578/4 — S620	
90	022-01	弥生土器 行付	7.4	2付+2付残る	直のため調整不明	直 ~0.5cm 細 ~0.5cm	2,578/6 2,578/6 — S620	
					摩訶のため調整不明	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm		
91	022-04	弥生土器 高杯		摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	5786/8 5786/8 — S620	
					付付繩			
92	021-02	弥生土器 高杯		2付+2付残る	付付+付後方向付	直 ~0.3cm 細微 ~0.3cm 細微	7,578/6 7,578/6 — S620	
93	021-04	弥生土器 高杯		2付+2付残る	直直文7本/1.2cm・18付	直 ~0.3cm 細微 ~0.3cm 細微	10787/4 10786/4 — S620	
94	021-03	弥生土器 高杯		2付+2付残る	直直文7本/1.8~2.0cm・19付	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	5786/8 5786/8 — S620	
95	032-01	陶製品 ハシチップ	長:8.3 幅:1.1 厚:0.8					
96	025-03	弥生土器 壺	9.4	摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.4cm 細 ~0.4cm	10788/4 10788/4 4/12 S621	
97	024-02	弥生土器 壺		摩訶のため調整不明	前直+4付	直 ~0.5cm 細 ~0.5cm	10787/3 10787/3 3/12 S621	
98	024-05	弥生土器 壺	17.0	ハサミ状に残る	32付+33付	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	10787/3 10787/3 3/12 S621	
99	024-07	弥生土器 壺	10.2	(付)	(付)	直+付繩少付	10787/4 10787/4 3/12 S621	
100	025-01	弥生土器 壺		工具による付	32付+33付	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	10787/3 10787/3 3/12 S621	
101	024-04	弥生土器 壺	7.3	摩訶のため調整不明	ハサミ状に残る	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	2,578/1 2,578/1 — S621	
102	024-03	弥生土器 壺	4.5	摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.1cm 細 ~0.1cm	10787/2 10787/2 — S621	
103	025-05	弥生土器 高杯	9.0	(付) 4	(付) 4・繩繩直繩+三方に孔	直 ~0.5cm 細微直繩+三方に孔	10786/6 10786/6 — S621	
104	024-01	上製品 土器	重18.7g	付	付	直	10786/6 10786/6 — S621	
105	028-01	須彌器	B-C-A	直直	直直	直	N6/ N6/ — S622	
106	026-04	須彌器	B-C-B	直直	直直	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	7,578/6 7,578/6 1/12 S621	
107	026-07	須彌器	B-C	付	付	直 ~0.1cm 細 ~0.1cm	2,578/6 2,578/6 3/12 S621	
108	026-02	須彌器	B-C	付	付	直	10787/6 10787/6 2/12 S621	
109	026-03	須彌器	B-C	32方向の付7本/1cm	32方向の付7本/1cm	直	10787/4 10787/4 3/12 S621	
110	026-05	須彌器	B-C	14.6	32方向の付7本/1cm	直	7,578/1 7,578/1 — S621	
111	026-06	須彌器	B-C	付	付	直	5787/1 5787/1 — S621	
112	027-01	須彌器	B-C	付	付	直	577/1 577/1 2/12 S621	
113	026-01	須彌器	B-C	付	付	直	10786/4 7,578/1 — S621	
114	027-03	須彌器	B-C	付	付	直	10786/6 7,578/6 2/12 S621	
115	027-04	須彌器	B-C	9.2	付	直	2,577/3 2,577/3 — S621	
116	030-02	弥生土器 壺	18.6	直直	直直	直 ~0.5cm 細 ~0.5cm	5786/6 5786/6 3/12 包含層	
117	030-01	弥生土器 壺	14.2	摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	10787/6 2,578/6 3/12 包含層	
118	030-03	弥生土器 高杯		摩訶のため調整不明	摩訶のため調整不明	直 ~0.4cm 細多	10786/10 10787/6 3/12 包含層	
119	030-05	弥生土器 高杯		刃方向付+32付	直直文4~5本/1.0cm・直+4付	直 ~0.8cm 細微	7,578/6 7,578/6 3/12 包含層	
					三方に孔			
120	028-01	弥生土器 高杯	12.9 13.0	11.2 付	四方向に孔	直+付繩	7,578/6 7,578/6 2/12 包含層	
121	030-06	須彌器	5.0	工具による付+後付	ハサミ+1.4cmの穿孔	やや直 ~0.3cm 細微	7,578/6 7,578/6 3/12 包含層	
122	030-04	土器器	直直	32付6本/1.5cm+32付	32付+33付+直	直 ~0.1cm 細微	10787/6 10787/6 — 包含層	
123	023-01	須彌器	B-C	14.8	直直	直 ~0.3cm 細 ~0.3cm	2,577/2 2,578/2 1/12 包含層	
124	023-02	須彌器	B-C	14.8	直直	直 ~0.1cm 細微	578/1 578/1 1/12 包含層	
125	029-02	須彌器	B-C	15.0	直直	直 ~0.3cm 細微	7,578/1 7,578/1 1/12 包含層	
126	029-04	須彌器	B-C	14.0	直直	直 ~0.2cm 細微	7,578/1 578/1 2/12 包含層	
127	029-03	須彌器	B-C	14.4	32付+33付	直直+32付+33付	直 ~0.2cm 細 ~0.2cm	10786/1 55/ 1/12 包含層
128	029-01	須彌器	B-C	10.6	直直	直直+32付+33付	直 ~0.2cm 細微	2,578/1 2,578/1 1/12 包含層
129	029-06	須彌器	B-C	9.6	直直	直直+32付+33付+直付高台	直 ~0.1cm 細微	10785/3 10785/3 1/12 包含層

第2表 出土遺物観察表 (2)

図版 1



調査区全景（東から）



調査区全景（南から）



S H 2 炉跡出土状況（南から）



S H 2 壁柱穴出土状況（南から）

図版 3



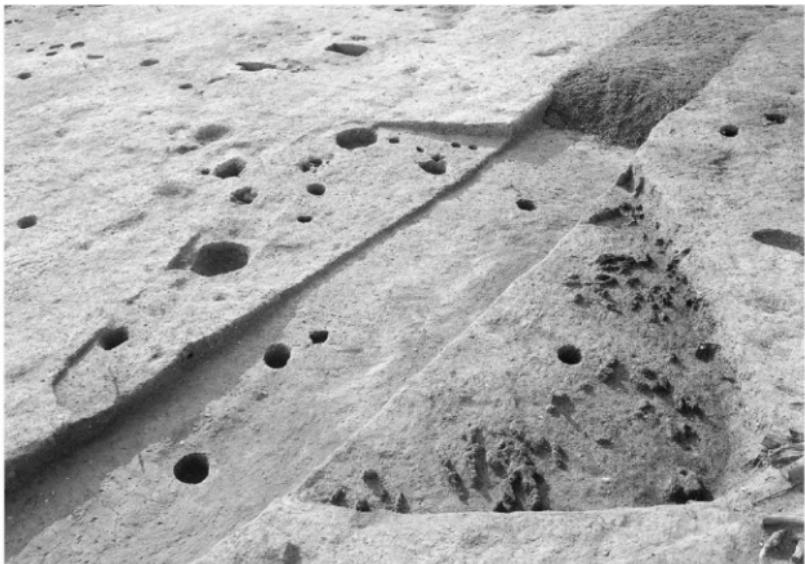
S H 2・3・4 完掘状況（南西から）



S H 3 遺物出土状況（北から）



S H 4 完掘状況（南西から）



S H 5 完掘状況（東から）

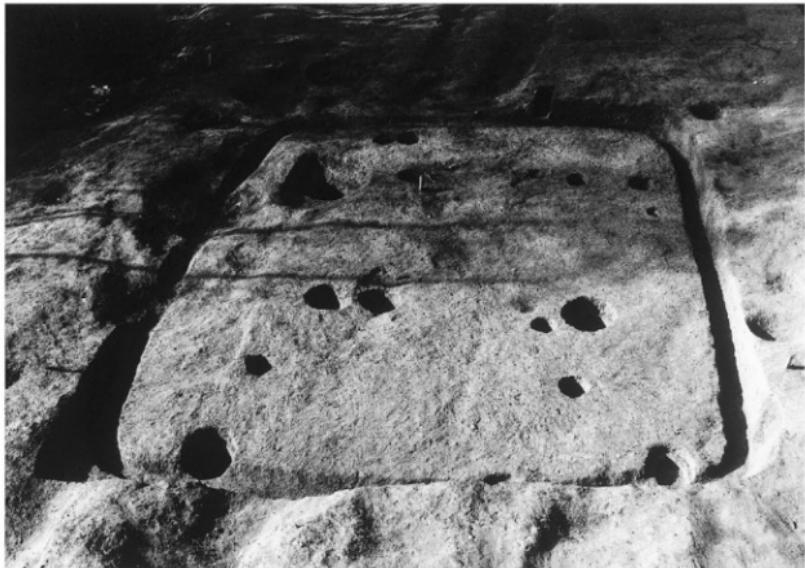
図版 5



S H 5 遺物出土状況（南から）



S H 20 完掘状況（北から）

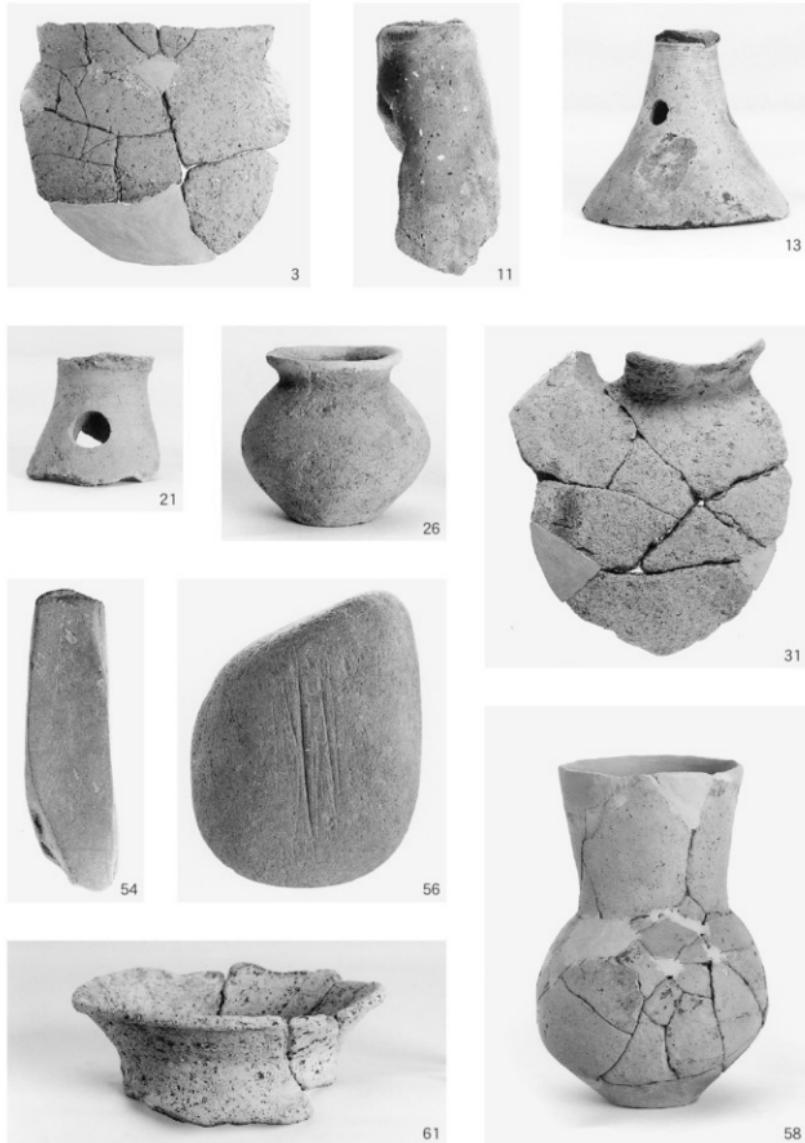


S H21完掘状況（北東から）



S B22完掘状況（北から）

図版 7



出土遺物写真(1) (縮尺不同)



63



67



66



75



80



85



108



27

53

104



120

出土遺物写真(2) (縮尺不同)

# 報告書抄録

ふりがな	しろのたにいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	城ノ谷遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	227-3							
編著者名	金子 智子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川 503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	2004年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		古河町	遺跡 番号					
城ノ谷遺跡	三重県四日市市 古水町・三重郡 朝日町埋藏	24202 24343	市66 町22	旧 35° 01' 52" 新 35° 02' 03"	旧 136° 38' 40" 新 (136° 38' 30")	1998.11.25 ~ 2000.03.09	2,114	近畿自動車 道名古屋神 戸線(第二名 神)愛知県境 ~四日市 JCT建設事 業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
城ノ谷遺跡	集落	弥生時代後期 古墳時代後期	竪穴住居 溝 土坑 掘立柱建物 小穴	弥生土器 土師器 須恵器				

三重県埋蔵文化財調査報告227-3  
しろのたに  
**城ノ谷遺跡発掘調査報告**

2004（平成16）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 (有)山文印 刷